常葉学園大学公開授業日参観の記録

平 沢 茂

(教育学部教授・教育研究所所長)

昨年 11 月 12 日、常葉学園大学の公開授業の参観のため、常葉学園大学を訪問した。同学における公開授業は、この日が 2 度目である。1 度目は、2007 年 11 月 14 日に開催された。

FD の様々な取り組みの中で、とりわけ授業公開が学生による授業評価等に比して、授業改善に対してより直接的で効果的な取り組みであることはよく知られている。しかしながら、授業公開に抵抗感を持つ大学教員が多いこともまたよく知られた事実である。いや、有り体に言えば、FD・授業改善そのものに関して認識が薄い教員や抵抗感を持つ教員が少なくないのが実態である。

そうした状況の中で、全教員参加による授業公開に踏み出したのは、同学が最初である。ここに至る経緯は、昨年度発行の報告書で述べた。念のため、ここで簡潔にその経緯を振り返っておこう。

1. 全学公開授業日設定に至る経緯

(1) 「授業方法研究・改善委員会」設置

同学に FD 推進のための「授業方法研究・改善委員会」（以下、FD 委員会）が設置されたのは 2002 年度である。FD 委員会がまず課題としたのは、FD に関する教員の意識改革である。上述したとおり、FD・授業改善に対して認識の薄い教員や抵抗感を持つ教員に、FD・授業改善の意識を高め、あるいは抵抗感を除く取り組みがまずは必要との判断である。

① 初年（2002）度の取り組み……「学生モニター会議」の設置である。「学生モニター会議」は、教員と学生とが同席して、授業に関しての意見交換をする公式の場である。出席が義務づけられたわけではなかったから、出席した教員は少なかった。しかし、出席した教員には、予想以上に大きなインパクトがあったという。実は、学生によるアンケート方式の教員評価よりも、教員と学生とが同席して授業に関する意見交換をする方が授業改善に効果があるとの見解もあり、相応の成果を上げたことは想像に難くない。しかし、教員全体の意識改革には、この方法では限界がある。

② 2003 年度の取り組み……FD 委員会委員による公開授業の実施。参観教員は少

なかった。しかし、教員相互の授業改善への意見交換は刺激があった。

③ 2004年度の取り組み……FD委員会委員の担当科目は常時公開とする。

④ 2005年度の取り組み……2005年度には、2つの取り組みが始まっている。1つは、全教員の全科目を常時公開授業とする取り組みである。もう1つは、**ストリーミング配信を活用した授業公開の準備**である。

前者の取り組みでは、授業を他の教員に見られる可能性があるとの意識が、全教員に植え付けられたことは確かであろう。とは言え、実際に他教員の授業を参観する教員が多くなかったことは確かであろう。自分の授業を他教員に見られたり、他教員の授業を見たりすることに対する心理的な抵抗は簡単に除かれるものではない。

また、他教員の授業を参観するために、授業日以外の日に大学に出向く教員は少ないであろうし、自分の授業のある日は、他教員の授業を見る時間的余裕はないであろう。他教員の通常の授業を参観するには、心理的にも、物理的にも壁があるということである。

そこで、第2の取り組みが計画され、その準備に入ったのである。ある教員の授業を録画し、ストリーミング配信する試みである。授業中の教室に足を運ぶのは先に述べた心理的・物理的な障壁がある。しかし、ストリーミング配信される授業なら、自分の研究室で見ることが出来る。この年はその準備が進められたのである。

⑤ 2006年度の取り組み……ストリーミング配信を活用した授業公開の実施。前年度に準備されたストリーミング配信を活用した授業公開が、実施に移された。収録し、配信する授業は、90分の授業をまるまる収録・配信するのではない。提案（他教員からの意見を聞きたいと考えている）部分的に絞りを絞り、気楽に見られるよう、1タイトルの授業は、10分程度に編集する。2006年度は、提案内容を「学習意欲と目的意識を高める効果的な導入の在り方」とし、14本の動画コンテンツを作成、配信を開始した。

⑥ 2007年度の取り組み……この年は、2つの取り組みが進められた。1つは、ストリーミング配信を活用した授業公開が継続された。もう1つが、全教員参加による公開授業の実施である。

1つめのストリーミング配信を活用した授業公開の成果は、FD委員会によって次のように報告されている。

「2006年10月の学内配信から2008年1月末日までの視聴回数（累計）は1146となっている。学内のみの配信であることと常勤教員数（受信可能な研究・室数）を考慮すると、ある程度の有効性が推察される。

また、コンテンツ視聴後に届いた感想の中には、「委員以外でも公開することは可能か」「次はぜひ私の講義を公開授業として録画して欲しい」「大人数の講義の実態

を配信して現状を理解してもらいたい」等、様々な観点から「授業公開に対する積極的な参加意志」を見ることができる。委員だけでは十分な対応ができない状況ではあるが、本学教員の意識が改革されている成果のひとつである」（常葉学園大学 授業方法研究・改善委員会編『常葉学園大学の授業改善』2008年3月）

2つめの全教員参加による公開授業は、2007年11月14日に通常の授業を休講にして次のような内容と日程で進められた。

- ① FD委員会の委員による提案授業(10:00～11:00)
- ② 委員以外の教員による公開授業(11:20～12:20)
- ③ 分科会 (13:20～14:20)

①～③とも学科別（6学科）の授業、分科会が設定されており、教員は自分の所属する学科の授業、分科会に出席したのだという。提案授業、公開授業とも、60分なので、通常の授業枠より短くなっている。

2. 2008年度授業研究公開授業

2008年度も、2007年度に引き続き、全教員参加による公開授業日が設定された。昨年2月に訪問した折、2度目となる2008年度の公開授業日の参観を申し入れたところ、副学長・角替教授と、担当の小田切教授が快くそれを了承してくれていたため、予定日少し前にお願いの電話を入れ、今回の参観となった。

当日、小田切教授は、主催者側責任者として運営業務が多忙なので、代わって猿田准教授にご案内いただくこととなった。猿田准教授も、同学授業方法研究・改善委員会の一員として運営に携わる立場にある。しかし、外来参観者の私のためにご案内役を引き受けてくださった。

公開授業は10時開始なので、9時過ぎに同学に到着し、猿田准教授の部屋を訪ねた。ご用意いただいた資料をもとに、参観の仕方について、打ち合わせをした。その結果、今回の参観の目的が公開授業の全体を把握することなので、駆け足（各授業とも7～8分程度）で全授業を見せてもらう選択をし、猿田准教授をお願いをした。

（1）今年度のプログラム

そのご報告にはいる前に、昨年度のプログラムと、今年度のプログラムに若干の相違があるので、そのことを見ておきたい。今年度のプログラムは次頁に掲げたとおりである。

常葉学園大学

平成 20 年度

授業研究公開授業日

公開授業（特別日課 10:00-11:00）

教員名	開講科目名	開講教室
鈴木 三平先生 海野くに子先生 星野 洋美先生	総合演習	3号館3302教室
望月 好徳先生	特別活動	本館 601教室
渋谷 恵 先生	社会教育計画特講	本館 418教室
加藤 敏之先生	教育心理学	3号館3418教室
長谷川晶子先生	communicative Writing I-B、Cクラス	本館 803教室
谷 誠司先生	対照・誤用分析一日韓B	3号館3419教室
安武 伸朗先生	インフォメーション・デザインC	3号館3517教室

※授業開始5分前までに各教室へのご移動をお願いします。

全体会（委員からの提案 11:20-12:10）

※2号館2階大会議室へのご移動をお願いします。

平成20年11月12日（水）

主催：常葉学園大学／常葉学園大学授業方法研究・改善委員会

前述したように、2007年度のプログラムは、次の3部構成であった。

- ① FD委員会の委員による提案授業(10:00～11:00)
- ② 委員以外の教員による公開授業(11:20～12:20)
- ③ 分科会 (13:20～14:20)

これに対し、2008年度のプログラムは、以下の2部構成となっている。

- ① 公開授業 (10:00～11:00)
- ② 全体会 (11:20～13:10)

授業が2部構成から、1部構成になった理由は、概ね次のようなものではないかと思われる。すなわち、初年度は、公開授業日のねらいを明らかにする意味で、FD委員による授業をする必要があるとの判断があったのではないかということである。

分科会が全体会に置き換えられた理由は、1つは、分科会だと全体の状況が把握できないということと、もう1つは、3回目以降の公開授業日やその他の授業改善の取り組みについて、FD委員会の考えを全教員に伝えたいということではないかと思われる。ちなみに、当日の参加教員数は、学会等で参加できなかった一部の教員を除いてほぼ全員であった。

では、当日の、概要をご報告しよう。それぞれ授業が、どのように行われていたかをご報告するのは、60分の授業の中の7～8分のみを見たわけだし、また、紙数の関係から言っても無理なので、いくつかの視点から。公開授業全体がどのようなものであったのかをご報告したい。

(2) 公開授業日の参観用配布資料

配布された資料は、その授業全体に関するものと、公開授業当日の授業に関するものが用意されていた。前者は、いわゆるシラバスであり、後者は、いわゆる指導案ということになる。それぞれはA4、1頁にプリントされている。

まず、授業全体の構造、いわゆるシラバスの構成は以下の通りで、一般的なものである。

- ① 授業科目の目的と概要
- ② 授業計画と内容
- ③ 評価方法
- ④ 教科書
- ⑤ 参考書
- ⑦ 備考

一方、本時の授業に関するいわゆる指導案は、小学校や中学校ではおなじみである。

しかし、大学の授業で指導案が用意されることはまずないであろう。

構成は次のようになっている。

- ① 本時の目標
- ② 本時の内容
- ③ 本時の展開
- ④ 本時の評価（参観の視点）

記述の仕方については、個々の教員に任されている。たとえば、目標について言えば、それが目標行動で書かれているものもあれば、従来型の記述方式で書かれたものもある。このあたりは、授業設計そのものに関する評価や認知の問題もあるから、統一することはまず無理であろう。このようなことも考慮して、2つの科目について、指導案を掲載しておこう（pp. 65～66）。

以上の他、各授業において使用されるハンドアウト等が、各教室に用意されていた。このあたりは、小学校等の研究授業と同様であった。

（3）授業者、学生、参観教員の様子

各授業の教室には、それぞれ、数人から十数人の参観教員がいた。

授業者の教員、学生とも、気負った様子もなければ必要以上に緊張している様子もなく、普段どおりの授業が行われていた。

参観している教員の様子は、資料を参照しながら、またメモを取りながら、それぞれ熱心に参観していた。居眠りをしている教員は、私の見た限り1人もいなかった。また、おつきあいで仕方なく見ているということもなく、それぞれ、関心を持って参観している様子が見て取れた。

3. 全体会

公開授業終了後、20分の休憩を挟んで、11:20からは全体会がもたれた。残念ながら、私は、午後の大学院教授会に出席するため、12時少し前に、中座しなければならなかった。全てをご報告することができない。まず、FD委員会の活動のこれまでの経過と今後の活動との報告に始まった。ここでは、FDの重要性と、同学におけるFD、とりわけ、公開授業の意義やその在り方が、説かれていた。それが終わって、参加教員からの質問や意見交換が始まるころ、中座を余儀なくされ、後ろ髪を引かれる思いで、同学を後にした。しかし、いずれ、このことについて、何らかの形で情報を入手し、ご報告したいと願っている。

4. その他、雑感

同学の全教員参加による公開授業は、FD委員会による時間をかけた積み重ねの他、同学に固有の様々な条件がかみ合っただけで可能になったもので、他大学がすぐにこれをまねることはとうてい無理であろう。しかし、これに近いかたちでの研究授業や授業公開を進める大学は増加しつつあり、大学におけるこの流れは、やがて加速されるに相違ない。

そのとき、本学はどのようにするのか。十分な準備なく急流に押し流されれば、行く末は概ね予想がつく。一方、流れを読み切れず、中州に取り残されれば、これまた、その行く末は見えている。どちらも、避けたい。流れを読み、流れをとらえて、流れに乗る、これが上策というものだろう。このことについては、まえがきで述べているので、ここでは重複を避けておこう。

さて、同学の公開授業を見て、もう1つ、あらためて気づいたことがある。授業条件の重要性である。クラス・サイズや持ちコマの問題などの条件とともに、物的条件の重要性にあらためて気づかされた。6つの授業の中で、小規模クラスの授業で、グループ・ワークをする場面があった。そこで、気づいたことである。

レイアウトが自在に変えられる教室がいくつもあるのである。机や椅子は可動性を考慮して選ばれており、活動内容に応じて、どのようなレイアウトも可能にしている。もとより、現代の大学で、もはや当たり前になった多様なメディア、特にICTに係るメディアの使い勝手の良さそうなこと、垂涎の的とはこういうことを言うのであろう。

これで、教員が授業力をつけたら、同学は、手強い競争相手になることは間違いない。静岡県の教育界における同学の評価は日増しに高まっていることはよく知られている。本学の行く末を考えたとき、刺激されることの多い大学である。